

# 図画工作科

桶本 佳江

## 1 図画工作科における学び続ける子供とは

図画工作科における学び続ける子供とは、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の形や色等と豊かに関わり、つくりだす喜びを味わいながら創造していく子供である。

### (1) 「造形的な見方・考え方を働かせる」とは

「造形的な見方・考え方」とは、感性や想像力を働かせ、対象や事象を形や色等の視点で捉え、自分のイメージをもちながら意味や価値をつくりだすことである。このような見方・考え方を働かせることで、形の面白さや色の美しさ等を感じることができる。

第4学年「ダン・ダ・ダ・ダンダン・ダイヘンシン！」では、大きな板段ボールを基底材として、切る、折る、くり抜く、貼る、組み立てる等で表したいものを表現した。A児は、段ボールの色味やライナー部分のつるつるとした感じとめくったときのザラザラした触感の対比を楽しんだ。そして、めくったフルーツ部分が土や砂利等のイメージと結びつき、ブルドーザーをレリーフ状で表すことを思い付いた。B児は、山や太陽をテーマとして、くり抜くことを中心に表現していた。同一の段ボールを使って表していたが、太陽の中心部分を、より厚みがありわずかに暖色の色味の段ボールを選び重ねて貼ることで太陽の大きさや暖かさを表していた。

このように、造形活動そのものが自分と対象や事象との関わりを深め、自分にとっての意味や価値をつくりだすことになる。造形的な見方・考え方を働かせ続けることが、「学び続ける」素地となる。

### (2) 「生活や社会の中の形や色等と豊かに関わる」とは

子供たちの生活や社会の中には様々な形や色が無数にある。この形や色等と「豊かに関わる」とは、繰り返し材料と関わり試行錯誤する中で自分の表現を見付けたり、鑑賞を通して新たな視点に気付き、活動や製作をよりよくしたりすることである。

C児は、試行錯誤して見付け出した様々な形を生かし、画面の中に変化のある作品をつくらうと考えながら取り組んでいた。全面に表現できた頃、互いの作品を鑑賞する時間を設けた。友達の作品から窓が開く仕組みや動きの面白さに感動したC児は、動く表現を取り入れたいと考え、扉を作り動く仕組みを付け加えた。何度も扉を動かし、次に扉の内側にてるてる坊主を隠すようにつけた。また、持ち手を表現しようと扉に切り込みを入れたが形がバンパイアの口みたいになったことに面白さを感じ、扉を開くとてるてる坊主が表れ、閉じるとバンパイアの口が表れる変化を楽しんだ。C児にとって「動く表現」が新しい視点となり、友達の「窓が開く」という動きを取り入れただけではなく、自分で見付けた「隠す」という表現を加えるなど再構築しながら新たな表現を生み出していた。

このように、自分の思いを生かした創造的な活動を楽しむ過程を通して、繰り返し材料に関わり試行錯誤することが、子供たちのよりよい活動をつくっていく。

### (3) 「つくりだす喜びを味わいながら創造していく」とは

「つくりだす喜びを味わう」とは、感性を働かせながら作品等をつくったり見たりすることそのものから喜びや楽しみを感じることである。このことは、子供の「表現したい」「見てみたい」という欲求を満たすとともに、自分の存在や成長を感じつつ新しいことや未知の世界に向かうエネルギーにもなる。

先の題材で、子供はそれぞれが自分のイメージをもとに表していったことから、レリーフ状の絵画のような作品、俯瞰して見ることでできるジオラマ風の作品、抽象的で模様のような半立体の作品など様々な作品をつかった。また、鑑賞を通して友達の表現のよさを感じた子供たちは、自分でも同じようにやってみようとして友達の取り組みをヒントにしてさらに意欲的に取り組んだ。レリーフ状の作品をつくっていたD児は、半立体の表現に触れ、別の段ボールを垂直に付け少しずらしながら何枚も重ねて段々畑をつくり、新しい表現ができたことを喜んでいて。

このようなつくりだす喜びから、子供たちは大きな満足感を得る。また、自分の手でつくりだしたことが自信となる。これらの満足感や自信が、次の活動に歩み出す原動力になる。

## 2 学び続ける子供を育てるには

### (1) 子供が必要感をもって学習対象と関わるために

#### ① 魅力的な題材、子供たちの思いや願いが膨らむような関わりがいのある材料を設定する

子供たちは、題材に興味をもち「やってみよう」という強い思いによって、「～のように表現したい」という願いをつくっていく。そこで、子供たちにとって発想や構想が膨らむような題材やテーマを設定する。同時に、繰り返し関わりがいのある材料を選定する。関わりがいのある材料に向き合い試行錯誤することで、よりよい表現をつくっていくことができる。

#### ② 自分の感覚を働かせながら知識や技能を身に付ける場を設定する

題材や材料の魅力から「表現したい」という膨らんだ思いを具現化するためには、知識や技能が必要である。知識は、子供たち一人一人が自分の視覚や触覚等の感覚を働かせ、自身自身の体を動かす等の行為や活動を通して理解したものであり、与えられたものだけでは身に付きにくい。技能も同様で、手や体全体の感覚を働かせ、材料や用具の特徴を生かしながら繰り返し材料を用いたり用具を使ったりすることで、自分で生かすことのできる技能となる。知識や技能を身に付ける場、確実にできるようになるよう十分な時間を確保する。

### (2) 子供が自ら問いをつくるために【重点】

#### ① 気付きが生まれる鑑賞のタイミングや場を工夫する

表現することに夢中になっているときは、自分の作品（物）との関わりが中心となる。自分の表現に満足し自信をもつことで、他の作品を見てみたいという思いが膨らんだり、自分の作品をより客観的に見ることができたりする。そのときの子供たちに付加され得る価値を捉え、鑑賞のタイミングを図る。鑑賞の方法は、相互鑑賞や教師の試作の比較等、そのときの子供たちに合った方法を工夫することが大切である。表現の違いそのものが図画工作科のズレであり、鑑賞により自分では思いつかなかった表現（ズレ）に出合うことで、自己の不完全さを自覚し、「もっと～したい」という新たな願いが生まれてくる。この新たな願いが図画工作科の問いである。

#### ② 相互鑑賞や教師試作等での比較の場を設定する

子供たちの表現は多様であることから、気付きや問い（願い）も様々である。そこで、気付いたそれぞれの表現のよさを言語化することで、何がどのようによいかと感じる自分であるのか、友達がどんなよさを感じているのかや、自分の表現と友達の表現の違いを比較する場をもつ。そうすることで、「もっと～したい」という願いを具現化するための新たな視点となる。

また、教科の特性として、感覚的によさは感じているものの言語化しにくい場面も予想される。共通事項を基に、教師が自分からのメッセージとして言語化して伝える、感覚的な言葉を共通の言語として使うなどの工夫が大切である。

### (3) 子供が自ら問いを解決するために

#### ① 子供たちが試行錯誤する場、自己決定する場を保障する

自分で考えつかなかった表現に出会い、刺激を受けた子供たちは、「自分でもやってみよう」「自分もよりよいものをつくり出したい」などの願いを強くする。そこでこの願いを受け、新たな表現を模索するための時間や材料を確保する。子供たちは、身に付けた知識や技能に新たな表現や気付きを加えながら、よりよい表現を追究していく。これまでつくってきたものに付け加えるだけでなく、試行錯誤する中でよりよい表現をつくり出し作品を一から作り直したいなどの思いも大切にすることで、自己の表現だけでなく自分で決めて進んだことから自信を深められるようにする。

#### ② 共通して得た知識や技能に関する掲示や、鑑賞で言語化した掲示等の環境を整える

鑑賞等でいただいた願いを自己の表現として表すときに、この題材で獲得した知識や技能、鑑賞で得た新しい視点や新しいイメージが拠り所となる。それらを常に掲示として見ることができるようしておくことで、子供たちは必要に応じて自分から情報を得ようとし、納得するまで自己の表現を追究していこう。そして、問いを解決した子供たちは、自分の活動や作品に満足感を感じ自信を深める。その満足感や自信が、表現を追求する意欲となっていく。